

News Letter

Foreign Student Service, Agriculture

二つの感想、思い出すままに

池 橋 宏
〔農学研究科教授〕
農学専攻

私は特別に国際交流を志した訳ではない。大学を卒業してからは、長らく農林水産省の試験場で国内のイネの品種改良に携わってきた。初めて外国に出かけたのは、35歳の時である。当時の航空機の運賃は、年収の半分といったケタであったように記憶している。ところが、ある時期から広い意味での国際交流は、私の仕事の大きな部分を占めるようになってしまった。なぜかと自分に問うたことがある。そして、どの分野であれ、日本で多少とも仕事ができるようになると、国際的な会合などに参加せざるを得なくなることに気が付いた。日本のあるグループを代表して出かけ、あるいは招かれるということになる。

国際交流の機会が多くなるに従い、私などより若い世代は、もっと気軽に外国へ出かけ、もっと深い交流をする様になるだろうと期待していた。ところが最近そうでもないことに気が付く。なぜそうなのか時々考える。国際交流だけではなく、違ったグループとの交流、あるいは話し合いそのものに消極的な人が目に付くことが気かりである。案外子供時代の環境も影響しているのだろうか。また、ドル安のため外国での仕事が金銭の上の魅力に乏しくなったこともあるのだろうか。

国際交流が進まない理由に、外国語教育のことがよくとり挙げられる。「中学から10年も英語教育を受けて会話一つできない」というような発言がよくある。私もそういった批判を免れない部類である。確かに気の効いた会話ができれば良いと思う。しかし、生まれ育った国のことばを話す人たちと、言語システムのまるで違った状況で育った人間が同じように話せる訳ではない。外国人と同じように会話ができることはありえない。

私の経験から分かることは、会合で相手の話が聞き取れるようになるには、英語を話す環境の中で1年以上生活しなければならないことである。その中で多少とも自分の意見を述べるができるためには、意識的に努力してももう少し時日が必要であろう。そのような環境に居ないで、相手の言うことを的確に聞いて、自分の意見を述べるができる様になれるとは思えない。ただ、読み書きの訓練は、そのような環境に身を置く前から心がけて置く必要がある。必ず役に立つと思う。

この間、ある国際研究機関の外部評価委員として、それぞれ違う国からきた7-8人のメンバーと合宿して仕事をした。その中で気が付いたことは、このような仕事に参加する人たちは、互いに国際共通語としての英語を使うよう心がけていることである。それは英語国での日常語とはよ

ほど違うものである。われわれが目指すのはそのような英語が駆使できることであろう。

さて、話題を転じて、留学生のことである。中年から国際研究所に勤務したり、大学の教育に関係するようになって、外国人学生とかかわるようになった。5指にあまる外国人博士も送り出した。一般的にいって、外国人の学生を扱うのは、日本人学生にくらべて数倍の時間がかかる。その挙げ句に誤解がとけないままに別れることもある。

最近の外国人学生には、日本でポストドックの職につきたいと強い期待を持っている人がいる。そして、それができないのは、指導教官の熱意が足りないと誤解があるようだ。また、それと関係して、出身国での学問の置かれている状況などとは別に、先端技術を身につけたいと志望する学生がいる。こちらは、もっと科学の研究の地味な本質に触れてもらいたいと思うので、誤解は大きくなる。国際協力事業団の援助計画でも、先方で運用できないような高価な機器をたくさん要求されることがあるが、それと似た話だ。

博士課程の中身についてもまだ改善の余地が多い。アメリカなどのようなコース教育ができないので、博士の達成度にもばらつきが多いようだ。私の知る限りにおいては、自分で次々と論文の書ける博士を生み出すには、まだまだしなければならないことが多い。また、日本人の大学院学生が多くなり、外国人学生を引き受けるような余裕がなくなってきたことも問題である。いくつかうまくいった例もあるが、概してこの面での疲労感は大い。



「ハイブリッド稲の父」袁隆平教授（右から2人目）
と筆者（左から2人目）

Parental Experience in Japan

Elmira Raheemovna
Karbozova

(Division of Environmental Science
and Technology, Kazakhstan)

Usually foreign students supposed to write about their academic experience. There are number of foreign students and researchers who is living with their families in Kyoto. And I think I can share my parental experience in Japan.

I remember, when I was an elementary school student I had read a story about Japanese school written by a Japanese writer which gave me a strong impression that Japan is different from the country I live in many ways. It was fascinating to imagine the people living in island where tsunami and earthquakes are common things, where fish and rice are eaten with chopsticks and women wearing famous kimono with a fan.

Many years had passed since that time and I had a chance to enjoy all those wonderful things together with my son Ilias. In Japan I had been having tight schedule, so on the third day after arriving Kyoto Ilias had to go to ordinary Japanese public school. It took not long for him to make new friends. But at the beginning he had some misunderstandings with elder boys of the school. I think it become like a rule in every country, that boy's attitude to newcomers is suspicious. They try to challenge a newcomer in order to test him. The rules have not been changed for Ilias. And as a matter of the fact Ilias proved himself to be socially easy-going and extended his friendship with schoolmates.

Few months passed when I suddenly realized that my son speaks and understands Japanese better than I do. In fact he often did translation for me whenever I couldn't use my English. He was very busy with his social life and I was delighted to see him happy with his new friends and his new schoolteachers. There are many opinions about elementary educational system in Japan among foreign parents. As a foreigner I can't principally evaluate the local educational system because what is acceptable for us wouldn't necessarily be acceptable for Japanese and vice versa. What I can say is that there are points that I used to like, and points that were sometimes strange and sometimes unfamiliar to me. But for certain I would say that my son was lucky to be accepted in Shugakuin Elementary School.

What surprised me was that one class consists of about 40 students. Elementary school students easily lose their concentration and attention. I think it isn't easy for one teacher to control and educate forty kids. Another point, which looked strange to me, is that younger students consider their teacher rather as a friend than as a teacher. Therefore students used to move and talk almost freely during classes.

What I liked most in Japanese elementary school is that there are many hours concerning life sciences. The class used to go to neighborhood mountainous area to study nature, to collect insects and plants. So we used to



海遊館にて 筆者(右)とイリアス君(真中)

have a big family here in Japan: frogs, "suzumushi", "kabutomushi", and hamster living together with us. In our home country we could never imagine buying special cases, foods and toys for beetles. But this is how kids learn to love nature. At school every student had to take care of some plant. Once Ilias came home very excitedly and proudly. He gave me few small red tomatoes and asked me to eat most delicious tomatoes in the world. He did grow them by himself! There is also much attention paid for physical education. Before Ilias didn't like much physical efforts. That is in Shugakuin elementary school where he learnt how to swim and swimming becomes his favorite sport.

I think criteria for evaluation of a society is different between adults and kids. However results might agree. We both spent pleasant time in Japan and best compliment for the Kyoto society is that the only place where Ilias wants to live, except his hometown, is Kyoto.

交流の歩み (15)



カナダにて

中川理奈子

(応用生命科学専攻)

私は大学の交換留学制度により、一年間カナダ, Department of Immunology, Faculty of Medicine, University of Torontoにて勉強させていただいた。以下に記すことは、私がカナダにて考えたことである。これは自己改悛に基づいており、何人をも批判するつもりはないことを初めに明記しておきたい。

1. 大学とは勉学の間である。

何を今さら、と思われる方が多かろう、と思う。しかし、少なくともこの私はその意味が何たるかをあまり理解して

いかなかったらしい。私の勉強態度は、行く前とは一変させられた。その理由を出来る限り説明しようと思う。

まず、そこには日本と北米の大学のシステムの違いがあった。日本の大学は、本人の自主性に重きがおかれ、勉強するも自由、勉強しないも自由、という雰囲気がある。従って、与えられた限りない時間の中で、自分の専門分野のみならずその他の知識も広く取り入れることを楽しむ人は、もちろん沢山いる。しかしその一方、人間は周りに流されやすい側面を持つ。大学入試までのつらい日々を思い、しばらくはもう少し楽に行こう、必要な単位を取って人並みに勉強していこう…。しかし、その人並みがくせ者である。大学入試のための勉強量を思い出せば一目瞭然、多くの人は大学に入ってからの方が勉強しておらず、しかもそれが当たり前になってしまっているのである。俄然、勉強しなくなっている自分に、私はもっと早く気がつくべきであった。

一方、北米の大学は入ってからが勝負の分かれ目である。Med school, Law school に行くためには死ぬ気で A+ を集め続けなければならない。また、行きたいコースに行く為に良い成績が要る場合もある(例えば、Immunology コースに入るためには四回生の初めまでに A- 平均が要る)。また、教授の方も安穩とはしてはられない。学生などによって厳しく評価され、給料、時には首さえかかってくる時もある。常に大学が緊張状態にある。従って、学生にあまり自主性はない。コース選択の自由はあるが、勉強する内容はほぼ均一である。しかし、授業の内容は濃く、ペースは異様に早い。

さて、この対極とも言えるシステム内を移動した場合はどうなるか。最初の3ヶ月はかなり悲壮であった。もちろんネイティブの英語が難しかったのもある。しかし、問題はそれよりも事前に拾得しておくべき知識の欠除、すなわち私の場合、Immunology の基本知識全般、授業システムの違い等に負うところが多く、結果的に私は泣きを見ることになった。また、今さらのように、大学院生でありながら、十分に勉強していなかったことに気付かされ、非常に恥をかいたのだった。

2. 能動的行動は自己啓発の源。

こちらの大学の行政システムはすべて1:1である。個

人で対処していく以外に方法は何もない。例えば、何か必要書類提出期限が有れば、ただそれは事務室の前に掲示して有るだけで誰も注意を喚起してはくれない。全て本人の責任である。逡巡する暇はない。能動的に行動してこそ、得るものがある。

私これを強く感じたのは、授業でわからない事が生じた時、それからテスト時間が合わない事など、自分に不都合なことが生じた時であった。授業でわからない所が有れば、それを放っておいてテストでひどい点を取るよりも、アポを取って先生、またはTAに聞いた方が良く、この単純な駆け引きにこれは基づく。もちろん、良く知らない相手に交渉を挑むのは気を使う。しかし、何にせよ、自分できないことが有ればどンドン相手方に交渉し、譲歩してもらおう…。たとえそれが上手く行かなくても、そうした途上で学ぶことは非常に多い。相手をより良く知るようになり人脈が広がるだけではなく、相手の対応の仕方の迅速さ、丁寧さ、また、時には実験の為になる参考文献などを得ることが出来る。普段サイエンスの世界(他をあまりよく知らないで、限定させていただく)にいと、モノに語りかけているような時間が多くなるように思う。こうしたヒトとの相互的接触を経ると、モノ、ヒトとの折衝時間の調和がとれ、同じ分野にいる他の人から受ける感銘、そして研究への原動力を感じるにより、自己啓発をより促すことになる。自分が生きていて、この世界にいてよかった、と感じる瞬間でもあった。

上に記した事は日本でももちろん起こっていることである。ただ、私自身のそうした相互関係への認識が薄かったため、これは非常なインパクトを持って迫ってくるようになった。行動する前に諦めてしまう、曖昧にごまかしてしまふ、そうした今までの態度を覆すものが、こうした人との折衝の中で生み出されたと思う。

以上、カナダにて感じたことを、徒然なるままに記してみた。その他に細かいことを色々思ったに違いないのだが、急には思い出せない。留学前と比べ、上記を除いて様々な点で変わったのだろうが、自分自身ではあまり認識できない。つらいことも色々あったが、非常に面白い経験をさせていただいたこの機会に何よりも非常に感謝している。この文章が微小ながらも、皆様の経験に何かしら訴えるところが有れば非常に幸いである。

新しい留学生室担当教官

森田勝子氏のプロフィール



平成12年1月1日付で、本学農学研究科応用生命科学専攻の助手・森田勝子氏(写真)が、留学生室担当助手として着任されました。森田氏は、京都市立大学農学部農芸化学科御卒業後、本学農学部農芸化学科に御就任になり、教務技官を経て、応用生命科学専攻の助手になりました。主に外国人客員教官の招聘に関する仕事をされま

すが、留学生室に対する種々の支援業務、および留学生の指導などとして下さいます。御本人の抱負を以下に御紹介いたします。「母国を離れて心細い思いをしていらっしゃる留学生達が、早く日本の学生生活になじめるよう積極的に交流をもって、困っていらっしゃる事があれば相談のり、楽しい留学生生活をおくっていただけるよう援助したい。それぞれの国の文化を紹介してもらおう機会を作ったり、また日本文化を理解していただける一助として茶道・華道・書道・日本料理などを指導していく機会を作り、日本文化の良さを少しでも体験していただけたらと思っています。」

同氏の今後の御活躍を大いに期待いたします。

赤松美紀
(農学部留学生室・助教授)

外国人留学生（研究者）の博士号取得状況
(平成11年1月～12月)

当該1年間に京都大学農学研究科に博士論文を提出し、京大博(農)の学位を授与された外国人留学生(研究者)は19名です。取得者の名前と論文テーマは以下の通りです。

Hendrayanto (森林科学専攻)

Analyses on Spatial Variability in Hydraulic Properties of Forest Soils

鄭 基晩 (農芸化学専攻)

The Charge-Relay System in Enzyme Catalysis: Construction and Function of Active Site Residues in Carboxypeptidase Y

Yunden Jinsmaa (食品工学専攻)

Designing of Novel Neuropeptides Improving Learning Performance

曾 寅初 (農林経済学専攻)

中国農村経済の成長における部門間の資源移転と技術進歩に関する実証的研究

Md. Abul Fazal (地域環境科学専攻)

Managing Groundwater Aquifers With Simulation/Optimization Models

Muhammad Munir Babar (地域環境科学専攻)

Near-field Identification and Simulation Models of Spillway Flows

Wahyu Dwianto (森林科学専攻)

Mechanism of Permanent Fixation of Radial Compressive Deformation of Wood by Heat or Steam Treatment

Bambang Hero Saharjo (森林科学専攻)

Study on Forest Fire Prevention for Fastgrowing Tree Species *Acacia mangium* Plantation in South Sumatra, Indonesia

Fauzi Febrianto (森林科学専攻)

Preparation and Properties Enhancement of Moldable Wood-Biodegradable Polymer Composites

Zaw Lwin Tun (地域環境科学専攻)

Mechanistic Approach to Multiphase Porous Media Modeling with Application of New Stress Principle

Frnan Rustiadi (地域環境科学専攻)

Spatial Analysis on Suburbanization Process

Mireille Dumoulin (農芸化学専攻)

High Pressure-Induced Cold Denaturation of Proteins: Structural and Functional Study of Wild Type and Unglycosylated Carboxypeptidase Y

李 濟勇 (地域環境科学専攻)

ロータリ耕うんにおける耕深制御に関する研究

Wong Ee Ding (森林科学専攻)

Density Profile: Its Formation and Effects on the Properties of particleboard and Fiberboard

Kamen Stoyanov Tsvetkov (応用生物科学専攻)

Introduction of Rye Chromosomal Segments Into Common Wheat by Means of Genetic Genome Rearrangement

謝 勝学 (応用生命科学専攻)

Enzymatic production of optically active acetylenic alcohols and α , β -diastereomeric amino acids

Sugeng Santoso (応用生物科学専攻)

Experimental Studies on the Density-Dependent Variations in Body Color and Dispersal Activity of the Three Rice Leafhoppers, *Nephotettix cincticeps*, *N. nigropictus* and *N. virescens* (Homoptera: Cicadellidae)

金 外京 (食品工学専攻)

Food Factors Inhibiting Nitric Oxide Generation in Macrophages: Screening of Vegetables and Fruits, and Inhibitors from Avocado Fruit

郭 又哲 (応用生物科学専攻)

Evaluation of the nutritional status of Japanese flounder *Paralichthys olivaceus* larvae and juveniles, and its application to the wild fish

農学部国際交流ニュース

農学研究科博士後期課程編入学考査

平成12年度農学研究科博士後期課程編入学考査は、1月25・26日に行われ、19名が合格しました。このうち私費外国人留学生は、応用生命科学専攻1名(韓国)、応用生物科学専攻1名(韓国)、地域環境科学専攻2名(中国・韓国)の合計4名でした。

農学部私費外国人特別選考試験

平成12年度私費外国人留学生特別選考試験は2月28日に行われ、6名の受験者があり、生物生産科学科(1名)と生物機能科学科(2名)に合格されました。



留学生室情報処理システム

寄贈いただいた松笠

留学生室の情報処理システム

平成10年度の教育改善推進費(学長裁量経費)にて、留学生室に以下の情報処理システムが導入されました。

サーバー 1台

パーソナルコンピュータ iMac 3台(2台は日本語, 1台は英語システム)・ThinkPad (Windows) 3台(日本語システム)・Linux 端末 1台

レーザープリンター 1台

中国語, 韓国語のソフトウェアもあり, インターネットをこれらの言語で見ることが可能です。まだ, 完全に整備されていない部分もありますが, 一部の留学生はすでに使用しています。今のところ, 空いていればいつでも使用可能ですので, 皆さん, 使いに来て下さい。

松 笠

昨年度, 日本農業総論で御講義いただいた演習林の大畠先生が, 講義で用いられました大きな松笠(メキシコ・アメリカフロリダ半島原産)を, 一部, 留学生室に寄贈して下さいました。留学生室書棚に陳列しておきますので, 聴講した留学生や興味のある方は見に来て下さい。

発行所 京都市左京区北白川追分町
京都大学農学部留学生室
電話 (075)753-6298, 6299

印刷所 京都市上京区下立売通小川東入
中西印刷株式会社
電話 (075)441-3155-8